

# 市高サッカー部通信 32号

朝日新聞の埼玉版に掲載していただきました。

## 青春スクロール

### 母校群像記

saitama@asahi.com

## サッカー部黄金時代 何度も全国制す

「埼玉を制するものは全国を制する」。高校サッカー界ではかつて、こう言われた時代があった。県立浦和、浦和西、浦和南とともに当時の4強の一つが、オレンジ色のユニホームがシンボルカラーの市立浦和のサッカー部だった。サッカー部は敗戦直後の1946年、社会科教師永田養三(故人)の指導のもとでできた。52年に東大蹴球部OBの鈴木駿一郎(故人)を指揮官に迎え、ショートパス、オープン攻撃を繰り出す戦法を確立。59年の国体に続き、その年度に行われた選手権大会で全国大会2冠を成し遂げる。当時の主将で高校ユース代表にもなった柴田和夫(78、60年卒)は、「3度目の国体出場が初めて日本一をつかんだことが自信になった」。選手権大会決勝の前夜は、旅館の大部屋に布団を敷き、枕をボールに見立ててオーバーヘッドキックをして遊ぶなどリラックスして試合に臨んだ。前半30分、



選手権大会の初ゴールが決勝点となり、優秀選手賞に輝いた柴田。翌朝は、JR浦和駅で市民ら500人もの大歓迎を受けた

## 市立浦和高校18



フルバックの柴田がハイフラインまで切り込んでロングシュートを放ち、左隅のネットを揺らまして決勝点を奪った。「体が震えまじった」。市高50年史に寄せた手記には、恩師や選手、マネージャー、指導してくれた先輩の名をちりばめて決勝戦を振り返った。「夢が現実になったのは、苦業をともにした仲間があつてこそでした」

選手権大会は連覇。62、63年には国体も連覇する。立役者は、元日本代表の主将で日本サッカー殿堂入りした、浦和レッズハートフッククラブキャプテン落合弘(74、64年卒)だった。日本ユース代表に選ばれるなど頭角を現した。繰り返し練習していたヒールを使ったフェイントが、本番で無意識のうち飛び出したシーンを鮮明に覚えている。「成果が出なくても懸命にやっつて、決して諦めないこと。その大切さを身をもって知りました」



入学式で新入生代表のあいさつをした秀才肌の落合。冷静沈着なふるまいから「鉄仮面」のあだ名があった

入部早々、監督だった鈴木駿の應對に驚いた。プレーを注視していた監督が「山田(落合の旧姓)さん、それじゃだめだ」と声を掛けてきたのだ。「熱血指導が当たり前の時代。こんな強豪チームでも選手を『さん付け』するの、か、と衝撃を受けました」。指導者の道を歩んだ落合は振り返る。「『さん付け』ではないにしても、私も選手に寄り添った指導を実践してきただけ。鈴木監督に植え付けられたものでした」

64年度の選手権大会では、4年ぶり3度目の栄冠を手にした。優勝に貢献した高2の選手の中に、後の日産自動車サッカー部創部メンバーで、元日本女子代表監督の鈴木保(73、66年卒)と、後に新日鉄サッカー部で活躍、日本代表になった日高憲敏(73、66年卒)がいた。センターバックの鈴木保は、大柄な相手ユースを体を張って防ぎ、フォワードの日高が、前半に得意のヘディングで得点し、



鈴木保は「ユニホームの上に学生服を着て授業に出ていた」と懐かしむ。いち早くグラウンドに飛び出すためだった

勝利に導いた。体調が芳しくなかった監督の鈴木駿に代わってベンチに入ったのは、初代監督で顧問の永田だった。病床にあった名將は、朗報を耳にした半年後に他界した。

しのぶ会でOBからは、部員が知らない指揮官の顔があったことを息子から聞いた。試合前夜は徹夜で、はがき大のわら半紙を積み上げ、びっしりと作戦を書き込んでいたというのだ。落合は言う。「計算されたプレーや作戦こそが、黄金時代を築いた市高サッカーの強さの秘密でした」

市高の練習には、OBがひんぱんにグラウンドに顔を見せ、指導にあたった。その一人で、鬼コーチと恐れられたのは、元浦和レディーズ監督石沢君男(故人、55年卒)。鈴木保は「石沢先輩のバイクがエンジン音を響かせてくるだけで、今日はきつくなる、とぞっ」としました。時には1チームできるほどのOBらが参加し、実践さながらの練習も。鈴木保と日高は感謝を込めて、こう言う。「レベルアップにOBの力は計り知れませんでした」



中学時代に都大会で優勝経験があった日高。市高サッカー部に憧れ、都内から2時間近くかけて通学した

敬称略

# 青春スクロール

## 母校群像記

saitama@asahi.com

### 「サッカー王国」で勝ち抜く伝統とプライド

市立浦和高校(市高)のサッカー部は1965年から監督を務めた磯貝純(88)のもとで新たな歴史を刻んだ。就任3年目で高校総体で初優勝を飾り、72年度には4度目の全国選手権大会制覇に導いた。

フォワードでチームを牽引したのが、ベガルタ仙台元監督の清水秀彦(66、73年卒)。ハーフバックには、一ツ年下で後に日本代表主将を務めた松江シティFC前監督の田中孝司(65、74年卒)がいた。

清水らの頂点までの道のりはしかし、苦難の連続だった。高2で出場した前年の選手権大会は、まさかの初戦敗退。日本一をつかんだ古豪がひしめく当時の埼玉は「サッカー王国」。磯貝は「このままでは地元に戻れない雰囲気があった。夜遅く浦和に戻り、ひっそりと解散した」と回想する。高



1983年度の選手権大会でもベスト8入りを果たした磯貝。「浦和のサッカーは人間教育の場だった」

### 市立浦和高校19



3の新チームになっても、関東大会も高校総体も県予選で敗退。「残すは選手権だけ」で、かろうじて出場権を得た。

下馬評にも上がらなかったが、運に恵まれ、初戦と第2戦は抽選勝ち(当時はPK戦がなかった)。

第3戦と準決勝は1-0で辛勝。2年前に4度目の優勝に輝いた強豪、藤枝東(静岡)との決戦の場を迎えた。冷たい風雨の中での一戦。磯貝は「ボールを高く上げる」ロビング、ロングキックで相手の連係プレーを断ち切れ」と指示。中盤の田中を中心に攻撃を封じ込め、延長戦にもつれ込んだが、清水がオフサイドラインぎりぎりから飛び出し、スライディングで決勝点を挙げた。

予想は「浦和劣勢の声が圧倒的だった。清水はそんな中で勝利をもぎ取った理由を「天が味方した

のも大きかったが、それにも増して、市高サッカー部の決して諦めないという伝統と、負けるわけにはいかないというプライドがあったからだと振り返る。田中も「埼玉を勝ち抜くことで『俺たちは強いんだ』と大きな自信を得ていた。中途半端に終わってしまるかという自負心も芽生えていた」と話す。

93年、Jリーグが開始されると、磯貝のもとからもJリーガーになる逸材が巣立っていった。代表格は、浦和レッズ初のJリーグ優勝に貢献し、現在は同チームでサッカー塾長を務める堀之内聖(41、98年卒)。高2で選手権大会に出場。準々決勝で、中村俊輔(42)を擁する桐光学園(神奈川)と対戦し、0-1で涙をのんだ。

13年ぶりのベスト8進出で「古豪復活」はアピールできたが、「ドリップルやキックの質が高く何度も

マークをかわされ、レベルの違いを肌で知った。あと一つ勝てば夢の国立で試合ができたがかなわなかった」と悔しさをにじませた。市高での試練は続いた。リベンジで挑んだ高3の選手権大会は、県予選決勝で逆転負け。追い打ちをかけて、サッカーでの大学の推薦入試にも落ちた。

夢の続きをつなげてくれたのが、ともにグラウンドで汗を流したサッカー部副顧問の英語教師福島智紀(64)だった。「選手生命は短い。留年させてはいけない」。センター試験対策をマンツーマンでバックアップ。堀之内は1日12時間の猛勉強でセンター試験を乗り切り、現役で東京学芸大学に進んだ。大学卒業を前にして、浦和レッズから「うちに来ないか」と誘われた。スカウト担当は市高のBの落合弘(市高88に掲載)その人だった。堀之内は、力を込めて言う。「市高はプロになる可能性を広げてくれたかけがえのない場所でした」。

敬称略



ベガルタ仙台監督時代の清水。現在は、宮城県内でサッカースクールを主宰する



選手権優勝の原動力になった田中。「凱旋(がいせん)した浦和駅西口は人で埋まり、熱烈な歓迎を受けた」



浦和レッズサッカー塾で子どもたちを指導する堀之内。市高の恩師、福島を塾のヘッドコーチに迎えた

# 青春スクロール

## 母校群像記

saitama@asahi.com



大山啓輔は、U16～19の日本代表として活躍した。大宮アルディージャ提供

「和気あいあい学校生活が送れそう」と市高に進んだ大山啓輔。ユースの練習に向かうため、たびたび掃除を抜けた



全国に名を響かせた市立浦和高校(市高)サッカー部。その一方で、校内には部活には属さずにJリーグまで上り詰めた兄弟もいた。兄の大山啓輔(34、2005年卒)は浦和レッズ、弟の大山啓輔(25、14年卒)は大宮アルディージャ、それぞれの育成チーム(ユース)からトップチームに駆け上がった。

### ユースと部活サッカーへの思い変わらず

はない俊輔は「こぞとばかりに暴れちゃいます」。その年の彩の国まごころ国体では、埼玉選抜(少年男子の部)の主将で活躍。3位決定戦で本田圭佑(34)がいる石川選抜を下した。「地元開催とあって、クラスメイトや先生がこぞって応援にきてくれた。真剣勝負の姿もみてもらえました」

プロで活躍する兄の背中をみて育った大山啓輔。ジュニアユースに所属し、高校でもユースに昇格。主将を務め、ユース日本代表にも選ばれた。合宿や国際試合で学校は休みがちだった。「卒業までがんばれたのは、授業をノートにまとめてくれた仲間たちや、ユースに専念できるような手を尽くしてくれた先生方のおかげです」

## 市立浦和高校20



かたや、台頭する私立志勢としてのぎを削っていた市高サッカー部も、13年度の全国選手権大会に5年ぶり14回目の出場を決めた。中心メンバーが大山啓輔の同級生で、現在はJリーグとして活躍する相レイソルの戸嶋祥郎(25、14年卒)と、京都サンガの富田康平(24、15年卒)だった。



「夏合宿で砂浜を走る朝マラ(早朝マラソン)ほどきつい練習はなかった」と話す戸嶋。日立柏レイソル提供



富田は高3の大会で決勝点を挙げ、思わぬ鬼監督に抱きついた。「そんな選手はたぶんボク1人です」◎KYOTO.F.S.

「全国」を目指す戸嶋たちの前に立ちほだかっていたのは、選手権の県大会連覇を狙う正智深谷。決勝点を演出したのは富田で、「こぞで決めてやる」と左足で蹴った渾身のコーナーキックだった。毎朝5時起きで、ひたすらボールタッチとクロスの自主練習を続けてきた。「このキックに練習のすべてを込めることができました」

当時の監督は、自らも市高時代にインターハイと全国選手権でベスト8になった経験がある池田一義(54、1986年卒)。優勝候補を相手に「攻めて勝つ」スタイルで一歩も引かずに、チャンスをものにした。池田が選手に求めたのは「考えて動くこと」。

戸嶋も「さまざまな場面で、『じゃあどうしたらいい』と問いかけてくれることで、考える習慣が身についた。全国大会への壁を破る大きな力となった」と振り返る。

戸嶋は浦和レッズのジュニアユース出身だが、ユース昇格がかなわず、サッカーを続けるために市

高に進んだ。ジュニアユース時代に競い合った大山啓輔を、部活の練習に招いたことがあった。「芝と違ったばここのグラウンドでも、さすが啓輔は華麗な足さばきだった」と戸嶋。大山も「ほかの運動部とも共用する狭い練習スペースで、戸嶋たちが全国レベルの力をつけているのは驚きでした」。練習後、二人は駅前のファミリーストランで夢を語り合った。闘いの舞台は違ってもサッカーへのあふれる思いは一緒だった。

創部75周年の今年、ピッチは人工芝に生まれ変わる。主将として埼玉を制したこともある監督大野恭平(42、97年卒)の下で新たな物語を紡いでいくだろう。

このサッカー編を最後に市立浦和高校編は終わる。長女も市高OGでサッカー部マネージャーだった、という元監督の池田に改めて、市高の魅力を聞いてみた。

「一切切磋磨きできる仲間に出会える場所。娘も入学させたい。そう思えるような学校ですね」  
＝敬称略



池田は、20年間の監督生活で高校総体や選手権大会など全国大会に5度コマを進めた

この連載は進藤健一が担当しました。